

痛みに対する東洋医学の運用

植月医院

植月 信雄

東洋医学とは、中国において主として漢民族によって発展し、朝鮮半島や日本に伝わり、それぞれ独自に発達した伝統的医学の総称である。日本では、17世紀頃に日本に紹介された西洋医学＝蘭学に対して、それと区別するために漢方と名付けられた。漢方医学のもとになる重要な中国医学古典は、黄帝内経（素問と靈枢の2部からなる）と傷寒論、金匱要略である。素問は中国医学の基礎理論を記述したもので、その中心となる理論は陰陽五行論である。傷寒論および金匱要略は、漢方方剤によるさまざまな疾患に対する治療法をまとめたもので、膨大な臨床経験をもとにした経験的医療体系である。

痛みを主訴に来院した患者に対する治療において、神経ブロックや西洋医学的薬物治療などの西洋医学的治療に限界を感じることは少なくない。これが痛みの治療において漢方薬処方を含めた東洋医学的治療の可能性を求める要因である。しかし、漢方薬処方の仕方が分からない、あるいは漢方エキス製剤の適応にしたがって処方しても思うような効果がでないと感じているペインクリニック医は多い。これは、第一に東洋医学理論が難解であり理論の臨床への応用方法が間違っている、第二に漢方薬を西洋医学的病名をもとに処方することが多い、というのが大きな理由であろう。漢方薬を含めた東洋医学的治療は、痛みをとることのみを目標に運用するものではなく、患者を痛みを持った一人の人間としてとらえ、東洋医学で最も重要と考えられている「バランスの調整」を目標に運用するものである。これにより効果的な東洋医学の運用ができ、言い換えれば、東洋医学的治療には「証」が重要であるということである。

証とは、その時点での患者全体の状態を表すものであり、証を導くことを「弁証」という。弁証にはさまざまな方法があるが、基本となる弁証法は八綱弁証と呼ばれる方法である。そこで今回の講演では、東洋医学ではどのように証を導くか、証をどのように漢方薬処方に結びつければよいかを八綱弁証をもとにして、実際の臨床に応用しやすい形で具体的に伝えられればよいと考えている。

ペインクリニック外来における超音波ガイド下神経ブロック

京都府立医科大学疼痛緩和医療学講座

深澤 圭太

近年、超音波機器の機能向上に伴い超音波ガイド下に神経ブロックを行うことが可能となり様々なブロックに応用されている。当初は主に手術麻酔における神経ブロックから発展してきたが、より多種類のブロックを施行するペインクリニック外来においてこそその真価が発揮されるといえるかもしれない。超音波ガイド下神経ブロックの利点は血管、骨、筋、腱、または神経そのものと自身が操るブロック針を画面上にリアルタイムにとらえながら神経ブロックを行えることにある。高性能でコンパクトな超音波機器を用いることで多くの神経ブロックが①より安全に②より簡単に③より確実に④放射線被曝の心配なくできるようになり、外来で施行する（できる）ブロックの種類も大幅に増加した。この新しい技術により（最近使用できるようになった新しい薬剤の恩恵も相まって）日々の診療において以前よりも確実に患者のQOLが向上していることを実感している。われわれ自身、ペインクリニックシヤンとしてのやりがいも増しているように感じる。さらに超音波機器は神経ブロックに使用するのみならず、時には疼痛の原因診断や合併症の診断までも可能にする。このように超音波機器ならびに超音波ガイド下神経ブロックはわれわれにとって非常に有用である一方、当然のことではあるが必要な知識と正しい技術を習得して施行しなければかえって危険な神経ブロックを行ってしまうことにもなりかねず、重大な合併症を引き起こす可能性もある。超音波機器の限界、自身の能力の限界を知ることは常に、非常に重要なことである。ペインクリニック外来において我々ペインクリニックシヤンはどのように、どこまで超音波ガイド下神経ブロックを活用すればいいのか。ブラインド手技によるブロック、透視下に行うブロックとの棲み分けと位置づけを含め、実際の診療の中で見えてきた超音波ガイド下神経ブロックの素晴らしさとその限界について概説したい。